

鳥取県西部地震による集落景観の変容と新たな対応の必要性 その2 日野町黒坂地区本通りの景観変貌の追跡調査から

正会員 石丸 紀興

鳥取県西部地震 集落景観 空地化
空家化 まち並み断絶現象 まち並み再形成

はじめに

本稿は、日本建築学会中国支部研究報告会において発表した論文¹⁾に続くもので、2000年10月6日13時30分に発生した鳥取県西部地震と、その後に進行した集落景観の変容について追跡調査したものである。集落景観変容の傾向については、すでに地震発生1年後にまとめて報告した「2000年鳥取県西部地震災害調査報告・2001年芸予地震災害調査報告」(日本建築学会、2001)において、拙著「地域における景観と生活の変貌」として発表している²⁾ので、併せて参照されたい。

1. 震災後集落景観変容の激しい黒坂地区本通りの概要

日野町地域の景観変容については既に報告したところであるが、その中でも著しく劇的な変容を見せているのが、日野町内の黒坂地区である。さらにその中でも最も目立つ存在が通称本通りといわれ通り沿いの景観である。今回は、黒坂地区全体については未調査であるので、本通りのまち並みについてのみ考察の対象とするものである(図1、2)。

日野町の中心集落は根雨と呼ばれる地区になるが、黒坂は歴史的には慶長年間に築城された城下町として形成されて城主関一政が入城し、元和3年関氏は断絶するものの、後に池田家の重臣を置く形となり、幕末まで陣屋町として維持された。その間、根雨と共に宿場の形成、周辺での新田開発、山砂鉄の採集、たたら製鉄などの産業の発展の核となり、商家のまち並みも形成された。明治以降は、近代産業の発展により産業構造が変化し、この地域は次第に賑わいを失い、戦後の高度経済成長期において決定的な過疎化が進行するところとなり、そこを鳥取県西部地震が直撃したのである(写真1、2、3)。

本通りは国道180号線から進入すれば、黒坂橋からJR伯備線踏切に至る約750メートルの南北道路とその両側を構成するまち並みである。本通り以外にも、ほぼ併行した2本の通りや数本の東西道路も加わり、狭いながらも直線的な道路によるネットワークが形成されている。本通りのほぼ中央から伯備線黒坂駅へ、下菅橋を通して日野川を越え国道180号線へと至る道路等も存在する。

この本通り沿いのまち並みは、地震によって大きな被害を受け、大きな景観変容みられた(写真4、5)。ほぼ連



図1 黒坂地区

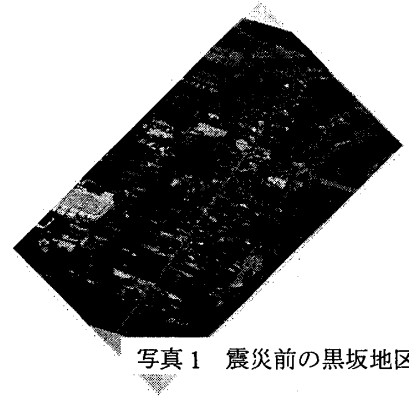


写真1 震災前の黒坂地区



写真2 震災直後の黒坂地区

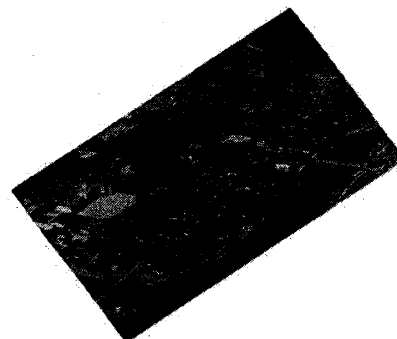


写真3 震災1年後の黒坂地区

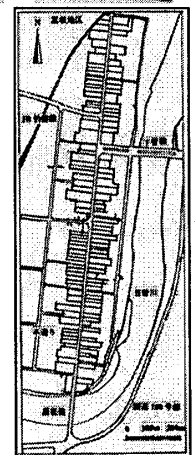


図2 調査対象の黒坂地区



写真4 空地化、駐車場化



写真5 空地化、建物小規模化後の黒坂地区

A Study on Changes of Rural Landscape and Necessity of New Countermeasures by Western Tottori Prefecture Earthquake—Part2
Through the Follow-up Survey of Landscape Changes of Hondori in Kurosaka District, Hino Area
Norioki ISHIMARU

続する町屋型住宅・店舗が傾いたり、崩壊したりしたので、目立つ存在となりテレビ等の格好の取材対象となったということもあるが、耐震性が確保されていない老朽化した建物が多かったということが被害を大きくした。地震直後から危険な建物を取り壊す動きが活発化し、特に取り壊し費用の補助制度の創設もあって、極めて早いうちに空地化する傾向が顕著となったのである。

2. 景観変貌の類型とまち並み問題

写真による景観変貌については既述したので、ここでは敷地利用の変貌を通しての結果的景観変貌について考察することとする。まず、地震直後に空地化した場所を図示したが、図3である。これには便宜上ガレージ・駐車場も含めている。このように、連続的なまち並み形成をしていた通りに、33件（多少の誤差がある）と多くの空地が出現したのである。

ただし、正確に言えば、地震発生以前から空地は存在していたのであり、正確なことは不明であるが、2000年頃の住宅地図帳によればある程度その存在が確認できる。それを図示したのが、図4である。これには建物は存在しても住人のいない空家も図示することができる。このとき、空地8件、空家4件であった。

そして、最近に至るまでにさらに敷地利用の変貌が進行した。その場合、いくつかグループ分け可能であり、それを類型として把握する。すなわち、以前から空地のままである（A型）、地震後空地化であるとするがその中で空家を取り壊され空地化したもの（B型）、以前は建物が建っていたものが取り壊され空地化したもの（C型）、以前からそのまま空家（D型）、地震による被害から立て直したもの（E型）、その他特殊型（F型）である。

このような類型化を完璧な正確さで実施することはできなかったが、地元の情報に詳しい人からのヒヤリングによって図示したのが図5である。これによれば地震直後からさらに空地化、空家化が進行しており、地震が決定的な要因となったといえる。しかし、見方を変えれば、震災はいずれ進行する傾向を加速、促進させる役割を果たしたといえる。すなわち、地震発生によらなくともいずれ進行する空地化、空家化を短期的に凝縮させたともいえるのである。とはいえ、長期的に進行すればその間対策的な試みも可能となったかもしれないのであるが、地震後は待たなすで進行しているということでは、過酷な実態といえる。一方、地震被害を乗り越えて新築、改造をはたして、住み続けている住民もいるのであり、決して本通りの生活圏が崩壊の方向に向かっているわけではないことも確認できる。

3. まとめと集落景観への対応の必要性

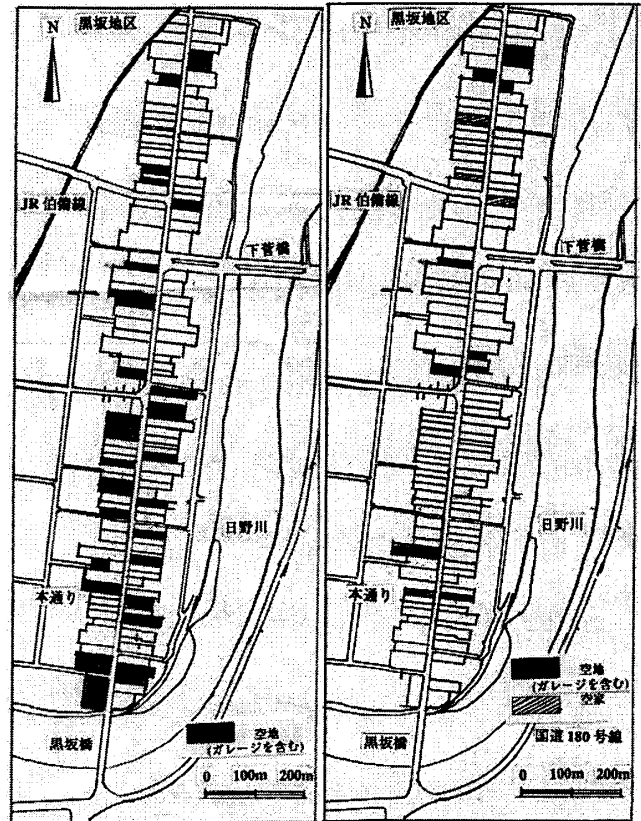


図3 震災直後の空地分布

図4 住宅地図帳での空地表示

敷地利用で見られることは、建直しが比較的集中していることである。連続性によって構成されていた景観が、空地化すれば歯が抜けたようになり、まち並み断絶現象を呈することとなる。現在駐車場化と植樹による緑化が見られるがまち並みの連続性を確保するための観点が必要であろう。

謝辞：日野町役場の関係者及び黒坂地区在住の牧智也氏から貴重な情報をいただいたことを記し、感謝の意を表する。

脚注：1)拙著：鳥取県西部地震による集落景観の変容と新たな対応の必要性―主として日野町地域の景観変貌の追跡調査から（日本建築学会中国支部研究報告集第30巻 pp.669-670、2007）

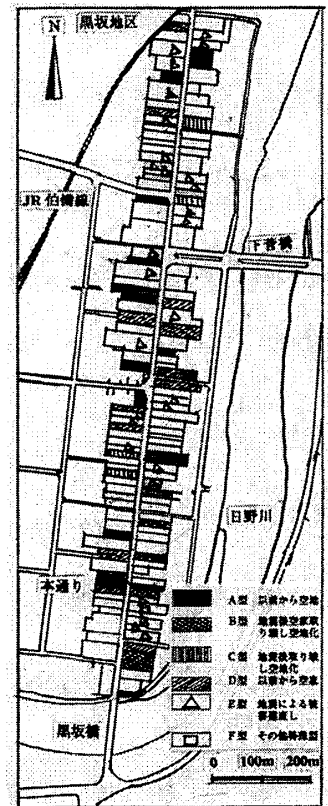


図5 敷地利用と景観の変貌型